

水琴寺一具、攝津口天王寺一具、所寄進也

其後百餘年之役、七大寺移置余者諸事皆絶了、東大

寺禪兩寺殘留、又、天王寺、住吉社如形有千今云云

又雅無習と与ミ給テハ公家一具被寄進、南無ハ此二樂人

天王一具被寄置、彼寺佛手佛事供養料、今案ハ其入衆

住ミ、寄進後三度絶了

と言いてある、此の伯近眞は算学の士であつて後日、

この伎衆の絶へることをうかいて、自分の職務以外の

伎衆をも至張則成より相伝してゐる、又、久安五年は

此の伯近眞の此著の天福元年より約八十五年前のこと

である、又、長承二年はそれより約十五年以前であつ

た、共に其の当時の伎衆は十曲程にへつてゐたらしい

味摩之が伝えた頃は非常に盛んであつたと思われ、

即ち舞衆に使用した面は約二百箇も正倉院に現存して

ゐる、これを覚えてもいかに盛んであつたかがわかる、

味摩之の傳口から約百三十年をへた天平十九年録上の

大和口法隆寺の「資財帳」の記載も伎衆百とあり何處

具は次の通りである。

伎衆 壹拾壹具
師子戲頭 五色毛 師子四面 衣服具

治道二面 衣服具 吳公壹面 衣服具

金剛壹面 衣服具 迦樓羅壹面 衣服具

毘薩壹面 衣服具 力士壹面 衣服具

婆羅門壹面 衣服具 孤子參面 被服具

醉胡七面 衣服具

と記してあり、現在でも伎衆の面は正倉院に百六十余

面、法隆寺に三十余面残つてゐる。

當時は伎衆の舞に合つた衆があつたのであらうけれ

ども何時か絶えて、唐の雅衆を使用するにいたつたの

である。

佛教に於ける民間行事に就いて

特に灌佛会を中心として

中西 恭 雄

佛教に於ける民間行事と云う言葉に二つの意味が考へ
られる、その内一つは民俗信仰と呼ぶもので、一
定の教理や教祖を持たない日本固有の信仰で、佛教渡
来後、多分に佛教的な色彩や影響を受けたもの、元か
らあつた行事が何時のまにか佛教の行事と化したもの
であり、今一は佛教渡来後、上流階級（朝廷、貴族、僧侶
等）の間に流行なれれた行事が次第に下層階級に鎮下し
て行つたもので、それが一般化され、庶民信仰と云う
表現で多く云はれてゐる広い範圍の層で行はれてゐる
行事である。

前者で云う民間なる言葉の意味は文化的にも知識的にも高度な指導階級に対する民間と云う意味でなく、むしろ知識の有無よりも民俗學で云う常民と云う概念に當るもの即ち比較的新しい文化に属さない伝承的文化の所有者を指すので、この意味で常民は教養ある知識人の思考形式が論理的、反動的であるに於いて、むしろ無知識の創造的、進歩的であるに於いて、模倣的、保守的な生産能力が常民の本質である。

後者に於ける民間なる言葉の意味は上階級に於ける下層階級、公官に対する民間と云う意味で庶民と云う言葉で云はれてゐない範圍の階級を云うのである。庶民——民間は上流階級が知識階級であるに反し、無知識階級に属するものであり、上流階級は少数であるに對し、庶民階級は多数であり今迄の歴史に於ては殆んど現われなかつた多数の人々を云うのである。

以上かゝる意味で民間、常民、庶民と二つの層として考へて見たがこれらの二つは別々な層として併存してゐるのではなく、平たく云へば大家の間で行はれた佛教行半が民間行半であるが、その民間に於てある場合は常民的な考へから、ある場合は庶民的な考へから佛教に對する視力や、之等の二つは別々な層として併立してゐるのではない。

かゝる意味の民間に、常民、庶民と二つの層を考へて

みたがその層に於て佛教の行事がどのように取扱われ、たか、どのように理解されて来たかを蓮佛会の行事を中心として考へ見たい。それで先事故ある佛教行事の内蓮佛会を撰んだかの理由を説明してあわせて本論で説かんとする主旨を述べねばならない。佛教の民間行事を見る上に蓮佛会を選んだ事は單に個人として興味があるからだとか、関心を持つてゐたからであると云う様な事でなく、もつと佛教の民間行事と云う問題と取組む上に、蓮佛会は次に述べる如き重要な意義を持つてゐるからである。

即ちオ一に蓮佛会は毎年時期が来れば必ず行はるべき行事であり、室町中期以後は一般の間に年中行事として広く行はれ風俗となつてゐた、それ以前に於ても宮中、公家、武家の間では年中行事として取扱はれ、その記録が種々の書物にあらはれてゐる。このような事實は蓮佛会が一回起生のの事件でなく、毎年恒例の行事とし、年々その時がめぐり来れば必ず繰返されるものであるから、それだけ深く生活と結びつき、我々の口民精神生活に融合し、實際面にまで、深く浸透してゐる。

オ二に佛教の多くは死者靈魂の管理者として機能を強く持ち、死者追善の呪力ある儀礼として受容され、一七より七七の斎会や忌忌の儀礼慣行となり、起塔

造像乃至其の修善行事ともなり、或は現実的な死靈鎮祭の儀礼としての意味が強つたようである。此等の傾向なり、特質にはそれなりに色々な意味や理由が考へられるがこゝではそれは他日によづり、灌仏会が死とが死者、死霊と全く正反對の人間の誕生を取扱う行事であり、悲しみや不浄とは反對に喜び祝ひ浄の要素を強く表現すべき行事であるが、此等の喜び祝ひ浄の要素がどのように表現されたか、或ある佛教行事の中で此の灌仏会に此等の明るい要素が見出されるか、否か見出されるかどのような形で表現されたかを見る上に意義を持つてゐる。

第三に灌仏会の行はれた時期（旧暦の四月八日）を中心として日本固有の様々な習俗や風習が行はれてゐる。農村に於ても都市に於て此等の習俗風習は長年にわたって行はれて来た。前記の常民の中に深くその根を持つてゐる。此等の習慣、風習は大部分灌仏会の名の本に行はれてゐるが、その本質や由来をたづねれば佛教と全然別個な予想もしない事に出合ふが此等と佛教の關係、或は影響を見る上に重要な意義を持つものである。第四に灌仏会は一部の階級の人々だけでなく、広い層にわたつて多くの人々の参加によつてなされてゐる事である。

第五に日本だけでなく、その起源は遠く印度に見ら

れ、多くの至典の中にその状況や意義が述べられてゐる。中口に於ても盛大に行はれた記録を有すべきを、此等印度中口の灌仏会と我口の灌仏会と比較し得る。その共通の要素の有る事も尋ね得ることが出来、仏教が世界的な宗教である故に、灌仏会も世界の至典とし行事とし、現代に於ても重要な意義を持ち、今後増々盛大に行はるべき佳節のものであり、キリスト教のクリスマスに於ける地位にまで高めなければならぬものである。

以上五つの理由を挙げたが、此の五つの理由は取りもなをさず本論で説明すべき主となるものである。此等を中心に於て本論を述べたり、但し上述の様な五つの項目に分けて説明するのでなく、本論で云はんとする趣旨を云つたものである。

そこで研究作業を進めるに當つて、どの様な立場で如何なる方法を取つて行くかを述べねばならぬ。従来の方史等は一回起年の事件や個人、天気の業跡や生活やあへうを問題とする方に重きが置かれて来たと同時に、一歩一歩人は客観的に事実をながめ、そして年代記的な事件の毎年繰返して行はれてゐる日常の生活や多くの名もなき人々の事に關しては余りかへり見られなかつた。言換へれば偉人の方史であり、大事件の方史であつた。それ故多数の下層階級の記録や資料の乏しい

のも当然である。仏教史学も此の弊に落入る事はまぬがれなかつた。聖徳太子、法然親鸞等の先哲や聖人達の研究や報告は多数あるが一般の多くの人々ほどのよつに仏教を信じ、どの様な態度で望んだかの研究は非常に少い。と同時に日本民族の歴史の外に仏教史があるが如き鎖鑰に落入りがちであり、仏教史が日本史と全然別個に閉鎖な一にある如く書かれた研究が出て来た。さてこゝで取扱ふべき問題は仏教の民間行事であり、研究の焦点は民間の人々に向けらるべきである。その故に資料もとぼしく、又記録も少ない。又時代的な区分を立てる事は困難であり、資料や記録無き部分は民俗学の助けを借りねばならない。と同時に上座の如き佛教史の弊害を少しでも除かんと競望するものである。そこで我々の取る立場と云ふは或る場合は対象に対して極限にまで接近し、その当時の人々と考へを同じくし、感動と共にすると同時に他面、我々が対象を全き相に於て把握せんとすれば、我々とそれとの距離を極限まで離して、そこに映じている全体をも見なければならぬ。そこに佛教史と云ふ、民俗学とか文化史と云う別個な方法を取るのではなく、それらの綜合の上に立つた大きな立場で此の問題を見て行きたい。

〔本論は本論の中序文のみ抜き置いた〕

佛教学記序 第二集

印刷 28.3.10

発行 28.3.17

編者 佛敎大学
佛敎学研究室

代表者 高田寛我